

Grounded Theory Approach による 母性発達課題に関する研究 (第1報)

— 妊娠による気持ちの変化と行動の変化 —

小松良子*・片桐千鶴*・三澤寿美・藤澤洋子

A Study on Maternal Developmental Tasks using Grounded Theory Approach (The first report)

— Changing Feelings and Behaviors during Pregnancy —

Ryoko KOMATSU, Chizu KATAGIRI, Sumi MISAWA, Yohko FUJISAWA

Abstract : The purpose of this study was to identify categories related to changing feelings and behaviors among Japanese pregnant women. Six primiparous were recruited from the two general hospitals in Y city. Semi-structure interviews were conducted between January and August in 2000. Grounded theory approach was used to collect and analyze the data.

For the changing feelings, four categories were identified, 1) positive changing, 2) negative changing, 3) ambivalent changing with negative and positive feelings, and 4) trying to change feelings from negative to positive. Regarding the changing behaviors, three categories were identified, 1) starting new behaviors, 2) stopping previous behaviors, and 3) continuing previous behaviors. The relationship between these categories was that when pregnant women had negative feelings, they tried to change their feelings from negative to positive, and their feelings toward their baby strengthened. At the same time, they started the new behaviors or stopped their previous behaviors. Further research should be needed to identify maternal tasks among Japanese pregnant women and present evidences for nursing interventions.

Key words : Pregnant women, Maternal tasks, Grounded theory approach

はじめに

母性は本能か?については、長い間論争がくりひろげられているが、統一した見解は得られてい

ない。母性看護学領域の先駆者である Rubin¹⁾ は、周産期にある女性へのインタビューを通して母親になる過程の主観的体験を30年前に発表した。その結果、母性は本能ではなく学習で獲得するものであるとの見解を示した。つまり女性は妊娠、出産、育児を通して自らに一定の母性課題 (maternal tasks) を課し、それを達成しながら母親役割を獲得していくと提唱した。特に妊娠中の母性課題は、①妊娠・出産を通じての自分自身と胎児の安全な経過を保証すること、②自分自身と自分の子供に

* 山形県立保健医療大学
山形県立保健医療短期大学
〒990-2212 山形市上柳 260 番地
Yamagata Prefectural University of Health Science
Department of Nurse Science
260 Kamiyanagi Yamagata City 990-2212 Japan

対する社会的受け入れを確保すること, ③「わたし」と「あなた」のイメージとアイデンティティの構成のために血縁的な結びつきを強めること, ④与えること受けることの交流行為の意味を深く追求すること, の4つである。さらにこれらの母性課題を達成し母親役割を獲得していくためには5つの操作が必要だと説明している。それらは模倣 (mimicry), 役割演技 (role play), 空想 (fantasy), 取り込み—投影—拒絶 (intorojection—projection—rejection), 悲嘆作業 (grief work) である。

わが国でも新道²⁾や大日向³⁾は, Rubin と同様の立場をとっており, 新道は母親役割獲得過程において妊娠期の課題が達成されないまま産褥期に移行した場合, 母親役割を遂行しにくいと述べている。つまり, 妊娠期は母親役割獲得過程の準備期にあたること⁴⁾を示している。大日向は心理学の立場から妊婦が妊娠をどのように受容し, 自分の中に位置づけるかという視点で, 母親自身の生活状況との関連性のなかで捉えた母性発達課題を検討する必要性を主張している。さらに妊婦を対象とした研究には妊婦の自己概念⁵⁾, 胎児への愛着形成^{6, 7)}や胎児感情^{8~10)}, 母親役割獲得に関するもの^{11~14)}などがある。しかし, これらの研究は Rubin の概念枠組みが万国共通であろうという前提のもとに行なわれている。Rubin が導き出した概念をそのまま看護介入の根拠として使用する試み^{13, 14)}はあるものの, 妊婦の行動や認識, 感情の意味を解釈し, 妊婦がどのような母性課題を持ち, 母親になろうとしているかを問い直すような研究は見あたらない。

さらに米国の白人女性を対象として提唱された概念がそのまま適用できるのかどうか, 30年という時代の変化や妊娠・出産に対する考え方の違い (例:腹帯を使用しない, 食事よりはサプリメントを服用する, 妊娠中他人にお腹を触られるのを好

まない, 無痛分娩を望む, 子育てに専念するよりは仕事をするなど)などを考慮すると, Rubin の母性発達課題を改めて見直す必要があるのではないかと考えた。

そこで, 本研究は人間を全体的に捉えようとする看護職者として, 質的帰納的な研究によりわが国の妊婦がどのような母性課題を達成しようとしているのかを把握し, 妊娠中の母性課題に関する概念を導き出すことを目的として着手した。

研究目的

本研究の目的は, わが国における母親役割獲得過程に関する理論の構築をめざして, 今回は第1報として妊婦が達成しようとしている母性発達課題に関する概念を導き出すことを目的とした。

方 法

1. Grounded Theory Approach を選んだ理由

本研究では, 対象者が妊婦であり, 妊婦の生活上の現象のデータをもとに帰納的にそのプロセスの概念を生成しようとするものである。木下が「Grounded Theory Approach に適した現象の特性は, 第一に実践的領域であり, もう一つは取り上げようとする現象がプロセス的性格を持っていることである」¹⁵⁾と述べるように, 看護の実践的領域としての妊婦の生活上のプロセスをデータとして取り上げる本研究に適していると考えた。

2. 対象者

総合病院2施設の産婦人科外来を訪れた初妊婦 (分娩の経験のない妊婦とした)6人を対象とした。初妊婦の選定にあたっては, 各外来に依頼し外来受診者の中から事前に初妊婦を選定してもらった。面接の承諾が得られた時点で異常がなく, また妊娠週数は特に考慮せずに選定した (Table1)。

対象を初妊婦としたのは, 経妊婦にプレインタ

Table1 対象者の背景

対 象	年齢(歳)	妊娠週数(週)	既往妊娠の有無	妊娠中の異常	近所の小さい子供の有無
A	28	27	無 し	特になし	い な い
B	36	37	無 し	特になし	近 所 に い る
C	20	13	無 し	特になし	姉 妹 の 子
D	36	29	無 し	悪阻で休暇	姉 妹 ・ 友 人 の 子
E	23	26	無 し	特になし	夫 の 弟 の 子
F氏	20	18	前 回 流 産	特になし	い な い

ビューを行った際、妊娠中の胎児に対する思いがなかなか語られず、上の子に対する思いがほとんどであったことから、今回は経妊婦を対象からはずすことにした。

3. データ収集

初妊婦を対象にインタビューしデータを収集した。インタビュー実施時は、対象の外来受診日に合わせて研究者が外来を訪れ、診察待ち時間や会計の待ち時間を利用し、外来にある保健指導室で行った。インタビューの所要時間は、待ち合いの時間でもあったため約20分間であった。

インタビューはICレコーダーを使用し、またインタビューガイドを用いて半構成的に実施した。妊婦の観察とインタビューアーのインタビュー時の気持ちを記録するためにフィールドノートをインタビュー終了後に速やかに記載した。

データ収集の期間は、2000年1月から8月までであった。

4. データ分析

インタビューデータは逐語録に書き起こし、インタビュー時に観察で得られた他の情報(フィールドノート)も付記して分析対象とした。

分析にはGrounded Theory Approach¹⁶⁾を用い、研究メンバー全員で検討しながら、継続的比較分析を行った。

オープン・コーディングは、インタビューデータをコード化していく過程で、話されている言葉一つ一つにラベルを付ける作業であり、一つの言葉に複数のラベルがつく場合もある。解釈には、文脈の情報も重視した。同時に分析者自身の考えも記録(セオリティカルノート)していった。セオリティカルノートに残された内容(コードの属性や次元)は、後の分析過程で役立った。この最初のコーディングでは、分析の焦点を模索するため、あらゆる方向に可能性を開く必要性があった。

次にオープン・コーディングと軸足コーディングの繰り返しにすすむが、コードとセオリティカルノートから、カテゴリーとその属性、そして次元は何かなどをデータに戻りながら分析し、一つのカテゴリーを導き出していった。

妊婦の気持ちの変化ではネガティブ、ポジティブ、アンビバレント、バランス保持のパターンがあり、行動の変化では開始、停止、持続のパターンが見られた。ここで妊婦が気持ちや行動を変化

させている軸となっているのは、胎児への思いであった。

5. データ収集と分析における信頼性の確保について

データ収集に先立ち、プレインタビューを行い、その結果を研究メンバー全員で検討し、インタビューの技術的ミスを少なくし、質の高いデータが収集できるようにつとめた。Grounded Theory Approachを用いた研究経験者のスーパービジョンを受けるとともに、GT(Grounded Theory)研究会に参加し、その学習内容も参考にしながら、データ分析の信頼性の確保につとめた。

6. 倫理的配慮

研究対象者への倫理的配慮としては、依頼文書を作成し、同意したあとでもいつでもやめられること、診療に不利益がないこと、データは研究目的以外に使用しないことを明記した。さらに同意書を作成し、研究についての丁寧な説明後に同意書にサインをもらうことにした。総合病院の病院長にも依頼文を提出し、了解を得た。本学の倫理委員長には、研究計画書を提出し了解を得た。

結果及び考察

妊婦はその時々何らかのきっかけで気持ちを変化させたり、行動を変化させたりしており、またその時に感じたことを素直に語っていた。さらに胎児に想いをめぐらせながら、将来自分が行っていくであろう育児についてや、現在妊婦を取り巻いている環境について話していることが分かった。その中から①気持ちの変化、②行動の変化、③将来の育児の方向性、④気持ちの事実、⑤環境からの影響という5つのカテゴリーが導き出された。

今回は研究の最初の段階として、①気持ちの変化と②行動の変化に焦点を絞り、カテゴリー間の関係を検討しながら軸になりそうなものを導きだし、さらにダイアグラムを使ってまとめていった。

1. 気持ちの変化

妊婦の気持ちの変化とは、妊娠を契機に妊婦が妊娠全期間を通して自分の気持ちを自分と胎児の双方に向け、様々なきっかけから自分の気持ちをポジティブな状態とネガティブな状態の間を行きつ戻りつすることをいう。また、ネガティブな状態をポジティブな状態に積極的に変化させようと

するときには行動を伴い、ポジティブな状態を持続しようとしていることも含まれる。

妊婦の気持ちの変化には、1) ポジティブな気持ちの変化、2) ネガティブな気持ちの変化、3) ポジティブな状態とネガティブな状態を繰り返すアンビバレンスな気持ちの変化、4) できる限りポジティブな状態を持続するためにバランスを保持しようとする気持ちの変化の4つのパターンが抽出された。

気持ちの変化には、妊娠反応がプラスになった時、妊娠が分かった時、胎動初覚、胎動、分娩、妊娠に伴う体形の変化、マイナートラブル、超音波画像・超音波のビデオ、環境、夫や母の言葉、育児の場面などの要因が関連していた。

1) ポジティブな気持ちの変化

妊婦のポジティブな気持ちの変化とは、胎児の存在を自覚したり実感することで胎児が安全だと確信し、胎児に対して愛情を感じ前向きな気持ちで過ごしていこうとする気持ちを持つことを意味する。

【Eさん】は胎動を感じたり、義理の妹の育児を見て次のように話した。

- 徐々にやっぱりお腹も大きくなってきて、もこもこ動くんで実感あるし、しっかりしようと思う。
- 私に育てられるのかなってというのがあったんですけど、主人の弟の奥さんとか見ていても何とかやっているみたいなんで、ああ私にもできそうだなって。

【Fさん】は8カ月前に流産を経験しており、今回の妊娠は継続できることを望んでいた。

夫と話したときに、私はできて嬉しかったんで、育てていきたいと思った。

妊婦には、次のようなポジティブな気持ちの変化が見られた。妊婦は体型の変化にも胎児の存在を自覚している様子も伺えたが、それよりもさらに胎動によって胎児の存在を実感し、自分の気持ちをふるいたたせるような気持ちを持って過ごそうとしていた。また夫と会話することで妊娠を喜ぶだけでなく、胎児を受け入れ将来子供を育てていこうと、児に対する責任感に似た気持ちを持

ち始めていた。さらにEさんのように育児の場面を見ることによって、自分が将来どんな育児をしていくかを想像し、自分ならばという子育てを考え、漠然とではあるが育児をしていこうという決意を持ち始めている様子がみられた。

2) ネガティブな気持ちの変化

妊婦のネガティブな気持ちの変化とは、胎児の存在が不確かなために不安を感じたり、胎児と自分の将来に対する不安を感じたり、自分の体調の変化が自分や胎児に悪影響を及ぼすのではという気持ちを持つことである。

【Dさん】は、つわりの時期が長期間に渡り、入院も経験し、その期間のことを次のように振り返っていた。

いつになったら良くなるのかなという感じで、お腹なんか最初は全然分からなかったし、6カ月半ぐらいでちょっと膨らんできたかなって感じで、それまでは気持ち悪いという実感しかなかった。胎動を6カ月ぐらいまで分からなくて。仕事なんかもしんどくて、働きながらのつわりだったから、休んでられないという気持ちもあって、うれしい反面辛くて。辛いばかりではないと思うけど、やっぱりしんどかったのはありますね。

Dさんはつわりの期間中体調が悪く、また胎児の存在が不確かであり先の見えない不安を抱え、自分の将来に不安を持ち胎児にまで気持ちを向けることができない状態でありネガティブな気持ちの期間が長かったことが伺えた。妊婦は妊娠に伴う体調の変化であるとは分かっているが、今までに経験したことのない体調の変化を経験すると、胎児の存在が不確かな時期はまずは自分がどうなるのかと、自分のことに意識が集中し胎児には目を向けることができにくい状況に陥ると考えられた。

3) アンビバレントな気持ちの変化

妊婦のアンビバレントな気持ちの変化とは、ポジティブな気持ちの状態とネガティブな気持ちの状態を繰り返し不安定な状態の気持ちの変化を意味する。

【Cさん】は実兄の子供の育児を体験していた。

お兄ちゃんの子供とか面倒見ているんで、自分もこういう事をしなくっちゃいけないんだなあって。オム

ツ交換とか, 出かける時に一緒に連れて行ったりとかしているんで。小さい子供はかわいいですね。自分でやると思うと大変ですね。ミルクとかもあげたりしているんですけど, 母親じゃないのが分かっているのか, あんまり飲んでくれないんですよ。それで, 自分の子供も飲んでくれるかと心配ですね。

Cさんは実兄の子供の育児体験をもとに, 産まれてくる我が子に対する育児を想像し, かわいいと感じるとともに, 育児の大変さと我が子が自分に対してどんな反応を示してくるのかに不安を感じていることが伺えた。妊婦にとって育児の実体験は, 体験そのものや育児の対象の反応によって妊婦の気持ちをアンビバレントな気持ちにしていた。

4) バランスを保持しようとする気持ちの変化

妊婦のバランスを保持しようとする気持ちの変化とは, ネガティブな気持ちの変化からポジティブな気持ちの状態に持っていこうと, バランスを保持しようとして気持ちを変化させたり, バランスを取るために行動を起こして気持ちを変化させたりすることを意味する。

【Eさん】は結婚前の妊娠で, はじめて妊娠を知ったとき母親に相談していた。

妊娠したと初めて分かった時にはすごい不安になって, 生む事自体まだまだ先の事だと思っていたんですけどすごく不安で, お母さんを直ぐに呼んで, どうしようって直ぐに相談したんですね。それで, お母さんに良かったじゃないって言われて, ああそうだよなあって, 前向きに考えられるようになったんです。

【Cさん】は実家で母親と同居しており, 次のように話した。

いままでお風呂掃除とかしていたんですよ。でも, お母さんが, なんですかお母さんの友達でお風呂掃除していて流産しちゃった人がいるみたいで, そういうのがあるから家の仕事とかもあんまり手伝っていない。おかあさんから言われるとやっぱり, 赤ちゃんがいるっていう実感, 強くなりますね。

【Dさん】はつわり症状がひどく食事を充分に取れない状態が続き胎児への悪影響を考慮して医師に相談していた。

つわりがひどくて食べ物とか食べれないときに食べなくても大丈夫なんだろうかって気になったんです。気持ち悪いし, 食べると吐いちゃうし。先生に相談したら大丈夫だよって教えてもらったんで, 大丈夫なんだっていう気持ちでいました。流産したらいやだなんて常にあったんで無理はしないように気をつけていました。

【Bさん】は看護婦であり, 妊娠37週となりもうすぐ出産を迎える時期になって次のように話した。

最初, 妊娠が分かったときにはうれしいんですけど実感はないですね。なんかこう, 本当かなみたいな。で, 4週毎の健診なんでその間, こう不安で。不安でしたね。やっぱり, 仕事柄, 流産ということも聞くんで元気に育っているかなみたいな感じもあるし, 動いていればこう元気に動いているという実感で伝わってきますよね。その辺で, 最初動くまでは心配とかそういうのもありましたね。私の場合は, ちょっとつわりもあったんで, つわりがある分だけ元気なんだからと言われていたからで, それもまあひとつ安心できるあれでしたけど。胎動を感じてからは, 生まれてからというか, その先ですね。なんていうかな, 元気でいるのは分かるんですけど, それ以上, 大丈夫かなというか身体とか赤ちゃんのそっちのほうは大丈夫かなと思ったんですけど, 今はもう, もうすぐだと思おうとその辺の消えていったかなと。

【Fさん】は健診時に超音波画像を撮っており, その後に家で見る超音波画像のことを話した。

ビデオもらって, 今日撮ってもらったビデオ見ている時とかは, なんか, いとおしく感じることもありますよ。動いているし。ビデオは, 夫より先に見たりもする。それから, 自分の子供はどんなだろう。どんな感じだべえって。元気なんだろうかって, 思ったときにも見ます。回数はそんなに見ないけど4週間で2~3回くらいしか見ていない。ビデオを見ているときは, これがお腹に入っているんだなあって。

妊婦にはバランスを取るために, 次のような気持ちの変化が見られた。妊婦は, 自分では解決できないのではと思ったり, 胎児の健康を害してしまうのではという不安な気持ちを, 母からの助言

や医師など専門家からの助言により、胎児の存在を実感し受け入れたり安心したりと、気持ちをポジティブな状態に変化させていた。またBさんは胎動を通して妊娠中のポジティブな気持ちと、ネガティブな気持ちの複雑な気持ちの揺れを表現していた。Bさんは胎動初覚の前には胎児の存在が不確かでありネガティブな気持ちが先行し、胎動初覚後には胎児の存在を確実なものとして実感し、胎児の安全を保障されたと感じていた。しかし、胎動は、胎児を実感させるだけでなく、胎児の奇形などにも思いをめぐらせる要因にもなり、胎児の将来に対する不安を持つことにもつながっていた。そして、分娩が近づくことでその不安が消え、前向きな気持ちに変化していくと話していた。さらに胎児の存在を確認する媒体や手段として、超音波画像やそのビデオは妊婦が視覚から胎児の存在を確認したり胎児のことを想像する要因となっていた。これは、胎児の安全が保証されたと感じさせ胎児に愛着を感じるポジティブな状態をもたらしていると考えられた。

2. 行動の変化

初妊婦の行動の変化とは、妊娠全期間を通して妊婦自身が妊娠期間を異常なく安全に過ごすためと、胎児が順調に成長するための影響を与えることや成長を妨げるような影響を排除しようと考えて、妊婦が自分の行動を変化させることをいう。行動の変化では、1) 自分の行動を新たに開始する変化、2) 自分の行動を停止する変化、3) 自分の行動を変化させず持続するの3つのパターンが抽出された。

行動の内容には生活習慣、喫煙、食事、仕事の内容、家事、子供のものを揃えるがあった。行動の変化の要因となるものは、妊娠、周囲からの助言、妊娠によって起こる身体の変化、胎動、胎児の成長、本、職場環境などであった。

1) 自分の行動を新たに開始する

妊婦が自分の行動を開始するとは、妊娠前にはやっていなかった行動を新たに開始することを意味する。

<助言による間接的な行動の変容>

【Eさん】は医師のアドバイスや母親の助言を受けて次のように話していた。

おかあさんとかが結構、二人分だから食べる食べ

ろって言うんですね、だけど私は先生とかからあんまり食べないようにねとか言われていたから、お菓子とかあんまり食べないようにはしていたんですけど、難しく。食卓にお母さんが並べてくれるんで、ほうれん草とかは、がんばって食べようかと思っているし、後は、レバーとか鉄分摂るようにお母さんも貧血みたいで、食べないと危ないから食べるって言われていて、おかげで貧血は大丈夫です。

<媒体による間接的な行動の変容>

【Bさん】は、本を読んだり音楽を聴くことについて次のように話していた。

嫁ぎ先の母は結構、胎教とか音楽とか考えてくれるけど、前期、中期、後期みたいな感じだから。その音楽を聴いて、本とか見ると自分の好きな音楽とかだとわりと効果があるみたいな感じだったのでどうかなとちょっと思いましたけど。母親がリラックスすることで子供にもいい影響を与えるという感じの必ずしもその音でなくても良いみたいな。リラックスするために、音楽聴いたりあとは何も考えないで、気分転換にちょっとドライブ行ったりとかしました。

<体調の変化による行動の変容>

【Fさん】は体調の変化をどのように受け止め、行動したかを話していた。

妊娠してから体調の優れないことが多くて、何かしら体調も変わってきたし、お腹の調子が良くなって妊娠前から便秘気味だったんですけど、余計便秘がひどくなって。便秘でイライラが増えます。一応食物繊維とかは妊娠前より摂っているんですけど。

<自己判断による自主的な行動の変容>

【Bさん】は看護婦で、未熟児室での勤務の経験があるため胎児が出生し生存可能な時期を判断し、行動したことを話していた。

子供のものを作ったりとか、オムツを縫ったりとかしているって聞きますよね。どうしようかと思ったんですけど、なかなかできなくて。でも、妊娠中期の安定期に入ってから子供のものを揃え始めました。本当はうれしくて早めに揃えたいんですけど。不安もあるから、やっぱり落ち着いてから揃え始めて、ほと

んど産休に入るちょっと前から揃え始めた感じでした。

自分の行動を新たに開始するという変化では、妊婦に次のような変化が見られた。妊婦は医師や母親からのアドバイスを受れたり、本などの媒体から影響を受け、自分の体調を整えるよう行動を変化させたり、胎児の成長が順調に行くように自分自身の気持ちをリラックスさせるなど、行動を変化させていた。ただし、Fさんは体調が優れないことが自分自身をイライラさせ胎児に悪影響を及ぼすと考え、体調を整えるよう行動を変化させていたが、体調が整わない状態にあった。行動を変化させることが、必ずしも状況を好転させるとはいえないとも考えられた。また、Bさんのように自分の知識から胎児の状態、状況を自分で判断し、胎児が順調に成長し生存可能と確信してから、将来の児の成長や生活のことを思って行動を開始する妊婦もいた。

2) 自分の行動を停止する

自分の行動を停止するとは、妊婦が妊娠前にしていた行動を止めることを意味する。

<意図的・自主的な行動の変容>

【Cさん】は仕事で重いものを持つ事があった事や喫煙の習慣について話していた。

妊娠って分かったときから、ズーッとタバコを吸っていたんですけど、きっぱりと止めれたんですよ。あと、結構会社で重い荷物とか持ったりするんであまり重い荷物とか持たないようにしたり。

【Fさん】は喫煙の習慣について話していた。

妊娠が分かったときから自分の意志で、以前は吸っていたんですけど、タバコをきっぱり止めて。赤ちゃんが育たなくなるといやだから。

【Eさん】は仕事を辞める時のことを話していた。

銀行の窓口だったんです。人がいっぱい来たりすると、イライラしちゃって絶対良くないなあって思ったんです。結構女の人でも少なくなくて負担も多くて、5カ月ぐらいで止めました。窓口やっていて結構気になったのが、お客さんのタバコとか吸っちゃうんですね、自分では吸わないけど周りに吸われるとちょっと気にな

るけど言えない。そういうのが気になりました。

【Fさん】は元介護の仕事をしていた時のことを話していた。

仕事を止めたのは、老人を抱えたりするので、私の腰に負担がくるんで、子供にも影響があるといやだなと思って。

<助言による行動の変容>

【Cさん】は妊娠して母親から助言を受けた時のことを話していた。

今まで、お風呂掃除とかしていたんですよ。でも、お母さんが、なんですかお母さんの友達で風呂掃除をしていて流産しちゃった人がいるみたいで、そういうことがあるから家の仕事とかもあんまり手伝っていないです。

<積極的な働きかけによる周囲の行動規制・自主的な行動の変容>

【Aさん】は胎動を感じたことで周囲に積極的に働き掛けたことを話していた。

胎動を感じた事で、ちょっとづつ自覚がというか、やっぱりそれまでの生活は胎動を感じないと分からないんですそんなに、あんまり自覚が無かったと言うか、それからはやっぱり食べ物とか周りの環境とかすごく気になりだしてましたね。それまでは、すごく甘いものとか大好きで炭酸飲料とかすごく。でも家の父が糖尿病を持っていたので、自分も遺伝でなりやすいと聞いたので、甘いものを食べないようにしたりとか、タバコを夫が吸っていたのでそれを気をつけてもらうとか、あとテレビの音がなんとなく騒々しいのは悪いのかなと思って、音を小さな音で聞くようにしたりとか。なんかそういう細かいことに。テレビの内容も日常生活があまりにも平和なんで刺激的なものを見たがるんですよ。そういうものだと、お腹に悪いかなと思って、音とか鉄砲の音とかよくないんじゃないかなと思って、小さく聞いたりとか。番組も殺伐の場面とかは見ないようにして、夫は好きなので見ているときはものすごく小さくしてもらって、私は本とか読んでいたり、別のことを言うようにしたりとか。

自分の行動を停止するという変化には、妊婦に次のような変化が見られた。妊婦は、妊娠を期に胎児の成長を妨げると考えられるものを自主的に排除するために行動を停止していた。また、妊娠経過中に自分の気持ちがイライラすることで胎児の成長に悪影響を与えたりと考えたり、仕事の内容が自分自身の身体に負担をかけそれが胎児に悪影響を与えたりと考えて、自主的、意図的に行動を停止していた。さらに母親からの助言で胎児の存在を脅かすと思われることを止めたり、胎動を感じ胎児の存在を実感し胎児の成長を妨げると考え、自分自身の行動を停止したり、制限したり、自分自身の行動の変化だけでは胎児の安全を守ることができないと判断した環境からの悪影響に関しては、周囲に働き掛けて行動を制限してもらったりというように行動を変化させていた。

3) 自分の行動を変化させない

自分の行動を変化させないとは、妊婦が妊娠前からの行動をそのまま持続し続けることを意味する。

<自主的な行動の維持>

【Dさん】は行動をあえて変化させなかったことについて次のように話していた。

家事とかを手伝ってもらったり、無理とかはしてい

ないです。自分で大切に育てなきゃみたいなのがあって、気持ち的には常に大事にしよう大切に育てようとは思っていたけど、特別にやったことはなくて、普通に生活していました。

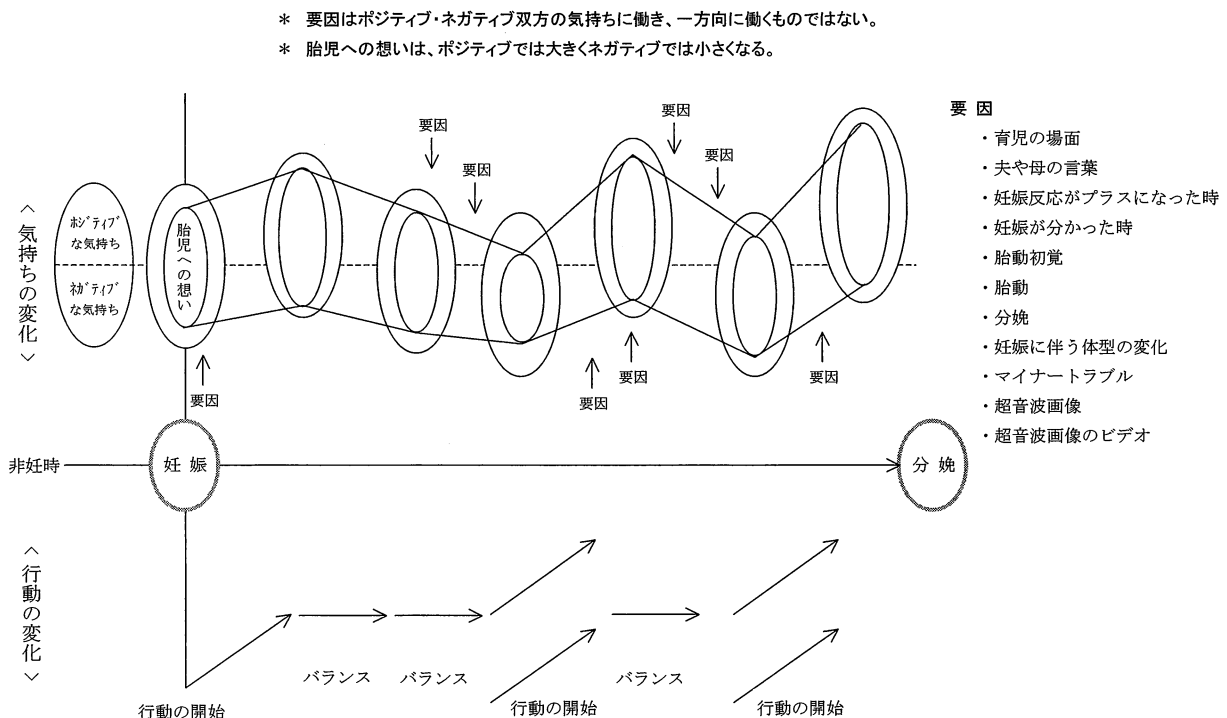
妊婦は、周囲に働きかけて援助を得、自分の行動を変化させないことで自分の体調を整えたり、妊娠を継続するために行動を変化させず、妊娠前の行動を持続させていた。このことは周囲に働き掛けて周囲の行動の変容により、自分の行動を変化させることなく行動を持続させているとも考えられた。

以上の分析結果から、それぞれのカテゴリ間には妊婦の胎児への想いがあり、常に胎児を中心に気持ちの変化、行動の変化が見られることが分かった。また、妊婦の胎児への想いは胎児が安全に順調に成長することを望んでいることであり、Rubin が妊婦の母性課題の第一に挙げている「妊娠出産を通じて自分自身と胎児の安全な経過を保障する」¹⁾と一致すると考えられた。

3. 気持の変化と行動の変化における概念間の関係

ここでは妊婦の気持ちの変化と行動の変化について、概念間の関係を図に示した。

Figure1. は、胎児への思いによって妊婦の気持ち



が変化するカテゴリーと、行動を変化させるカテゴリーとの関連を示している。妊婦は妊娠を契機に自分の気持ちの中に胎児を意識し、胎児への想いが大きく膨らんでくる。妊婦の気持ちは様々な要因によって影響を受け、ポジティブになったりネガティブになったりする。ネガティブになった時には、なるべくポジティブになろうと自分自身の気持ちを変化させたり、何らかの行動を起こして気持ちをポジティブに変化させようとしていた。そこにはポジティブな状態を持続し、バランスを取ろうとする気持ちの変化が見られた。また、胎児への想いも妊婦の気持ちの変化とともに変化していると考えられた。胎児への想いは、妊婦の気持ちがポジティブに変化したときには胎児への想いが大きくなり、ネガティブに変化したときには胎児への想いが小さくなっていった。

妊婦の気持ちを変化させる要因は Figure1. に示すように様々なことがあげられるが、それぞれの要因は、ただ単に一方にポジティブに働いたりネガティブに働いたりするわけではなく、妊婦のその時々での身体的状態や精神的状態によって、ポジティブにもネガティブにも働くと考えられた。

妊婦が行動を変化させるときには、胎児にどのような影響があるかを考えて行動していた。結果的に胎児が順調に成長することが妊婦にとって行動を変化させる第一の目標となり、ポジティブな気持ちを持続し、バランスを取ることに繋がっていた。妊婦の行動パターンは、自主的・意図的な行動、間接的な行動、周囲への積極的な働き掛けによる周囲の行動規制、体調の変化による行動などがあつた。行動変化の内容は、生活習慣、喫煙、食事、仕事の内容、家事などであつたが、どの行動が行動開始、停止、持続となるかは、その時々での妊婦の身体的、精神的状況によって異なると考えられた。

研究の限界と課題

今回の分析から抽出されたカテゴリーは、①気持ちの変化、②行動の変化、③将来の育児の方向性、④気持ちの事実、⑤環境からの影響であつた。今回は第 1 報として、気持ちの変化と行動の変化に焦点をあてて報告した。妊婦の気持ちは様々な要因の影響を受けて変化していることが分かつたが、それぞれの要因がどの時期にどのような方向

に影響を与えているかについては、明らかにするに至らなかつた。妊婦の気持ちの変化と行動の変化は、妊娠が終了する分娩の頃まで継続されていると考えられるが、今回は妊娠期 1 回だけのインタビューであるため分娩時の気持ちや行動の変化まで分析するに至っていない。また今後の課題として他のカテゴリー間の関連を考察し、さらに妊娠初期、中期、後期にインタビューを実施することで、より妊娠の経過に沿った妊婦を把握し、もっと広く深い概念化やその構造化を目指したいと考える。また、今後妊婦の母性発達課題についてもさらに追究していきたい。

今回は研究メンバー全員が質的研究への取り組みははじめての経験であり、スーパーバイザーの指導を受けながらも熟練したとは言いがたい。質的研究では研究者の分析能力が抽出される結果に影響するため、今回の結果には限界があると言える。しかし、今後はデータをより深く読み込むとともに、データに込められた文脈から意味を深く汲み取る努力をしながら、分析能力を高めていく必要性を感じた。また今回は理論的飽和に至らなかつた可能性もあるが、さらにデータ収集、分析を重ねることで理論的飽和を確認していきたい。さらに、一人の対象に対するインタビューが 20 分間であつたことと、病院という場所は対象に話しやすい環境を提供するには限界があつたのではないかと危惧する。今後は一人の対象に対して、対象の了解を得ながら何回かインタビューを試み、信頼関係を築き、話しやすい雰囲気を整えるとともに、対象が話しやすい場所の選定を考慮し、データを収集できることが望ましいと考える。

謝 辞

今回の研究にあたり、快くインタビューに協力して下さつた妊婦の方々に深く感謝するとともに、研究の場を提供して下さりました 2 施設のスタッフの方々に深謝いたします。さらに、研究計画の段階から貴重な助言をくださった大阪府立看護大学の町浦美智子先生に深く感謝いたします。

尚、本研究は平成 12 年度及び平成 13 年度の本学共同研究費の援助を受けて行つたものです。

文 献

- 1) Rubin, R. : Maternal identity and the maternal

- experience, 1984. 新道幸恵, 後藤桂子 (訳): ルヴァ・ルービン 母性論 — 母性の主観的体験 —, 医学書院, 東京, 1997.
- 2) 新道幸恵, 和田サヨ子: 母性の心理社会的側面と看護ケア, 医学書院, 東京, 1996.
- 3) 大日向雅美: 母性の研究 — その形成と変容の過程: 伝統的母性観への反証 —, 川島書店, 東京, 1988.
- 4) Mercer, R. T.: A theoretical framework for studying factor that impact on the maternal role, *Nursing Research*, 30(2), 73-77, 1981.
- 5) 岩田銀子, 山内葉月, 杉下知子: 妊婦の自己概念の再形成に関する一考察, *母性衛生*, 38(2), 167-172, 1997.
- 6) 成田伸, 前原澄子: 母親の胎児への愛着形成に関する研究, *日本看護科学会誌*, 13(2), 1-9, 1993.
- 7) 辻野順子, 雄山真弓, 乾原正, 甲村弘子: 母親の胎児及び新生児への愛着の関連性と愛着に及ぼす要因 — 知識発見法による分析 —, *母性衛生*, 41(2), 326-335, 2001.
- 8) 交野好子: 妊娠前半期の胎児認知, *母性衛生*, 38(1), 12-17, 1997.
- 9) 交野好子: 妊婦の胎児認知と想像, *母性衛生*, 38(2), 288-296, 1997.
- 10) 交野好子: 続・妊婦の胎児認知と想像 — 胎児の認知方法の違いから見た比較検討 —, *母性衛生*, 39(1), 38-42, 1999.
- 11) 石井邦子, 森恵美, 前原澄子: 妊娠期における母親役割獲得プロセスと共感性との関連について, *日本看護科学会誌*, 17(4), 37-45, 1997.
- 12) 石井邦子, 森恵美: 妊娠・育児体験が女性の共感性に与える影響について, *母性衛生*, 40(1), 103-108, 1999.
- 13) 大平光子, 前原澄子, 森恵美: 妊娠期の母親役割獲得過程を促進する看護の検討 (第1報) — “模倣” 及び “ロールプレイ” に対する看護介入 —, *母性衛生*, 40(1), 152-159, 1999.
- 14) 石井邦子: 看護援助による妊婦の胎児への感性の変化, *母性衛生*, 42(1), 22-28, 2001.
- 15) 木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチ — 質的実証研究の再生 —, 弘文堂, 180-181, 東京, 1999.
- 16) Strauss, A. & Corbin, J.: *Basics of qualitative research Grounded theory procedures and techniques* —, 1990. 南裕子, 操華子, 森岡崇, 志自岐康子, 竹崎久美子 (訳): 質的研究の基礎 — グラウンデッド・セオリーの技法と手順 —, 医学書院, 東京, 1999.
- 2001. 11. 15. 受稿, 2002. 1. 17. 受理 —

要 約

本研究の目的は、日本人妊婦の妊娠中の気持ちと行動の変化に焦点をあて、それらを概念化することである。Y市の総合病院2施設の産婦人科外来を訪れた初妊婦6人を対象に、2000年1月から8月にかけて半構成的インタビューを行い、Grounded Theory Approachを用いてデータを分析した。

気持ちの変化では4つの概念が抽出された。1) ポジティブな変化, 2) ネガティブな変化, 3) ポジティブ・ネガティブな変化が混在する状態, 4) ネガティブをポジティブに移行させようとする状態であった。行動の変化では3つの概念が抽出された。1) 新たに開始する, 2) 妊娠前の行動を停止する, 3) 妊娠前の行動を持続するであった。これらの概念間の関係を見ると、気持ちがネガティブになると、胎児への想いが大きくなりポジティブに変化させようとする力が働き、その時に行動を開始する、または妊娠前の行動を停止していた。今回抽出された概念をもとに日本人妊婦の母性発達課題を明らかにし、看護介入への根拠とするためには今後も継続的な研究が必要である。

キーワード: 妊婦, 母性課題, グラウンデッド・セオリー・アプローチ